



### 【登場人物】

源氏の君……琴の琴を弾く  
明石の君……箏の琴を弾く

### 【場面解説】

兄・朱雀帝への謀反を疑われ、身の潔白のためにみずから須磨、明石に謹慎していた源氏の君も、ついに許され都に戻る日がやってきました。明石の入道の強い願いで娘の明石の君と契りを結んだ源氏の君ですが、その気高い人柄に惹かれ足しげく通うようになる内に、明石の君は源氏の君の子を宿します。この子こそ、占い師に予言された後の帝の后となる運命の子でした。

いよいよ明石を経つ日が近づいた夜、源氏の君は初めて琴の名手と言われた明石の君と合奏し、その音色の素晴らしさに、これまで聴かせてもらえなかったことを悔やみます。

詞書の明石の君の和歌に対し、源氏の君は「この琴の調律が狂わない内に必ず会いましょうね」と将来を誓うのでした。

吹抜屋台の建物の構図と、明石の海辺の松の並木が、三角を描く様に伸びた構図の上には、二人を照らす満月が輝き、源氏が、別れに際して、藻塩を焼く煙を一緒に都の方へ漂うと表現した藻塩を焼く二つの塩釜も、二人の姿の象徴かのように、寄り添うように描かれています。

### 【詞書】

ことばがき

扇面に書かれている文字

なをざりに

たのめをくめるひとことを

つきせぬねにや

かけてしのばむ

(明石の君から源氏の君への和歌)

### 【現代語訳】

どうせ口からの出まかせに頼もしそうなことを仰るのでしようが、その一言を頼りにして、私は尽きず声を上げて泣きながら、あなたのことをお慰びいたします。